

# 第15講

## 論説・評論(1)——内容説明

### 要点整理

傍線部の意味内容を把握させる設問が内容説明問題である。基本的な設問であり、部分的な読解力を試している。その代表的な設問形式には次のようなものがある。

・傍線部「……」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

・傍線部「……」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

### ◎解法のポイント

① 傍線部中の語句で、その説明が特に求められているキーワードを特定する(キーワードとなる語は一つとは限らない)。傍線部の意味内容を適切に説明した選択肢を選ぶわけだが、傍線部のキーワードに対する説明にしほり選択肢を比較考量することにより、説明の適否を明確にする。

② 傍線部だけでその内容を把握することは困難であるから、その前後の文脈に手がかりを求める。場合によっては前後の段落、さらには離れた段落に手がかりを求めなければならないこともある。特に離れた段落の場合は、傍線部の前後と趣旨が同じである箇所や、同じキーワードが使われている箇所に着眼する。

③ 傍線部の前後をそのまま引用しただけの選択肢は誤りであることが多い(これを「ひっかけ」という)。正解はむしろキーワードとなる語句を他の語句(本文中にない語句であることもある)で言い換えた選択肢であると理解した方がよい。

内容説明問題は読解力の問題であると同時に、語彙力の問題でもある。同内容の言い回しかどうかを見極めるためには、ふだんから語彙力を高めておくことが大切である。

## 演習問題 A

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

音楽の場が侵すべからざる非日常的な空間であったコンサートホールを離れて日常生活の場へと移動したということ  
は、音楽を日常化させ、聴き手の聴取態度を根本的に変質させた。純粋に鑑賞を目的とした聴衆たちが集まってくる特  
殊な空間の中で作品の中に作者の個性を聴き取り、その個性の結晶としての表現を読みとるという極度に集中的・精神  
的な性格をもっていた聴取行為は、日常生活の中に移されることによって、散漫で表面的な環境体験へと形を変える。  
こうした動きは最近の新しいメディアの登場によってさらに加速化された。ヘッドホンステレオの出現によって、

①②について  
A・B  
への変化

①②について

人々はオーディオ装置の置いてある場所にすらゆく必要がなくなり、音楽を一つの環境として持ち歩くことができるよ  
うになった。また、CDの出現は作品の一部分をピックアップして繋ぎ合わせて聴くような断片的な聴き方を容易にし、  
その結果、作品は作者の個性によって統一された一つのまとまった全体であることをやめ、局所的な刺激断片の集合体  
と化した。

かつては厳しく排除された断片的な感覚刺激を求める聴き方が、作品を作者の精神と結びつけ、そこに作者の思想を  
読みとろうとするような「真面目」な聴き方を駆逐する。残ったのは表層的な感覚刺激と戯れる「軽やかな」聴衆の存  
在である。音楽のスタイルもまたそうした聴き方に対応して変化し、今や音楽文化全体が「軽やか」になりつつある、  
二〇世紀に進行した聴取形態の変化をやや乱暴にまとめればそんなところになるであろう。だが本当にそうなのだろう  
か?

まず、「作曲家神話」の形成というかなり具体的なテーマを論ずることからはじめたい。一九世紀という時代はとり  
わけ大作曲家に関する数多くの「神話」を生み出してきた。そして最近の研究の中で、バッハ、モーツァルトらの巨匠  
たちに関してわれわれがこれまで信じてきた話の多くが虚構であったことが明らかにされるようになり、多くの「神  
話」が解体されるにいたった。

バッハがその人生の後半、ライプツィヒにとどまり、敬虔なルター派信者として宗教音楽に没頭したという話は、教  
会カンタータの作曲年代の研究の進展とバッハの手紙などの新資料の発見によって、ほとんど否定され、彼の教会音楽  
への関心はライプツィヒに移って間もなく失われてしまったらしいことが判明した。

晩年のモーツァルトが人々に理解されなかったために、自作を演奏してもらえず、生活費にも事欠くほど貧乏しなが  
ら懸命に清らかな作品を書き続けたという話も、ウィーンでの演奏会記録の調査などから最近では疑問視されはじめ、  
ついにはモーツァルトが貧乏したのはビリヤードをやりにすぎたからにちがいないなどという説まで登場  
する始末である。

ベートーヴェンを描いた肖像画や彫像の体系的な調査によって、われわれがよく眼にする、あの眼光鋭い強そうな顔  
は一九世紀後半以降に急速に普及したものであることが明らかとなった。個々の歴史的事実のみならず、自らの過酷な  
運命に抗して強靱な意志力をもって一生を闘い続けた作曲家ベートーヴェンという作曲家のイメージ自体が、一九世  
紀に形成された「神話」だったともいえるのである。

これらの「神話」の多くが近代的な聴取形態の確立した一九世紀に形成され、最近になって、そのような聴取形態の  
崩壊とともに解体したのは偶然ではない。この種の「神話」は、まさに現代において解体しつつある「真面目な」聴衆  
を支えてきた「純粋鑑賞」の精神の所産であるということができるところである。

この種の神話の多くがその作品を作った作曲家の人格や作曲家がそれを作った時の状況に関するものであることに注  
意しておきたい。聴き手は作品を聴きながら作者の人格や個性を感得し、作曲をした時の作者の心情に思いを馳せる。  
それは作品を鑑賞するという行為が、まさにそのようにあるべきだと考えられてきたからである。作品が作者の精神の  
結晶であり、その個性の発露であるという限りに限って、作品を純粋に鑑賞するとはそのようなことなのであり、ただ

### インプット

#### 読解のポイント

- ① 特に説明が求められるキーワードには、抽象的な語句・比喩的な語句・簡潔に要約された語句などが多い。
- ② 最初に本文を意味の上からいくつかの大きなまとまりに分けておくといよい。傍線部の説明は、それを含むまとまりの中で処理できることが多い。
- ③ 対比的な内容や類似した内容に着目して、文章の構成をつかむ。
- ④ 傍線部またはその前後にある接続語(接続詞や接続助詞)のはたらきを理解して、文章の構造を把握する。たとえば傍線部またはその直前・直後に「つまり」「すなわち」などある場合は、同内容の言い換えであることを示している。

### 重要語句

◇メディア＝情報伝達の媒介手段となる

もの。新聞・テレビ・ラジオなど。

◇ピックアップ＝拾い上げること。

◇神話＝一般には絶対的なものと考えられているが、実は根拠のない考え方や事柄。

◇敬虔＝うやまいつつしむこと。特に、神仏を心からうやまいつつしむこと。

◇強靱＝強くてしなやかなこと。

◇感得＝感じ取って会得すること。深い道理などを悟り知ること。

## 「神話」の具体例

②

30

35

音を追うだけの感覚表層の快楽に流された行為は真の鑑賞とはいえないことになる。  
③ ところがここに一つのパラドックスがある。作品を純粋に鑑賞するということは、同時に聴き手が作者を離れた作品それ自体に集中するというところをも要求するからである。学者でもない限り、聴き手は鑑賞の際に現実の作者についての伝記を調べて裏付けをとるなどということはしない。もちろん聴き手が現実の作曲家や作曲の状況についての知識を動員する場合もあるにせよ、そういうことを調べるのは学者の役割であり、それがなければ鑑賞が成り立たないわけではない（もちろんそうであれば、われわれの鑑賞行為はほとんど成り立たなくなってしまうであろう）。  
鑑賞行為はむしろ、よい知識のような不純な要素を排して、作品に純粋に集中することではなくてはならなかった。その結果作者の人格や作曲の状況は、実証的なドキュメントによってではなく、鑑賞者の想像力によって補われることにならざるを得ないのである。

これは西洋の近代的な芸術作品の基本的なあり方にかかわっている。

作者は実在の人間として現実のコンテキストの中で作品を作るが、それが公にされ、純粋に鑑賞される対象となるという限りにおいて作品はそういう現実のコンテキストからは切り離される。そしてこうして現実のコンテキストからいったん切り離された作品に、聴き手は鑑賞行為の中で想像力によって再び新たなコンテキストを纏わせるのである。その結果、現実の作曲家や作曲の状況ではなく、作品をもとに想像力によってイメージされた作曲家や作曲の状況が作品というテキストに対するコンテキストとして聴き手にもたらされる。

作曲家にかかわる「神話」はそのような間隙を縫って作品に付着してくる。一九世紀におびただしくもたらされたさまざまな「作曲家神話」はこのような近代的な芸術作品のあり方から構造的に生み出されてくるのであり、それが作品を純粋に鑑賞し、作者の精神の所産として解釈しようとする近代的聴取態度の相関者であることは以上のことから納得されるであろう。

そういう点からすれば、現代の聴衆のあり方はまさにそのような神話を生み出す構造の対極にあるといえるだろう。彼らが「軽やかな聴衆」として利他的・つまみぐいの作品とかかわるといふ限りで、またそれを作曲家の人格の所産として精神的に鑑賞することをやめてしまうという限りで、神話は生み出されることはない。その意味で現代が「脱神話化」の時代であるということは決して偶然のことではない。

だが、これは事柄の一面に過ぎない。なぜなら現代はまた作品というテキストとコンテキストとの別の形のかかわりを生じさせているからである。その一例として映像メディアの存在を挙げることができる。

レコードやCDが聴覚以外の要素を捨象して「純粋鑑賞」の原理を推し進めたのに対して、最近ではビデオやLDなどの視覚メディアが普及し、視覚的な要素を捨象して聴覚的な要素だけを取り出してきた従来の音響メディアがいかに一面的であったかが明らかになってきた。オペラのようにもともと視覚的要素が重要であったものはいかに及ばず（オペラのレコードやCDなどという、よく考えてみれば欠陥商品としか思えないようなものが堂々と出回っていたところにかつての「純粋鑑賞」のありようが象徴されている）、純粋な器楽演奏でも音響が視覚映像とともに与えられることによって異なった印象が生ずる。

これは一面ではあらゆるコンテキストを消去して純粋に音だけを求めてきた近代的な「純粋鑑賞」に対するアンチテーゼともいえ、ある場面では、コンテキストをも含めたトータルな体験を回復することによって「純粋鑑賞」によって生じる神話を除去する方向にはたらく。事実、ビデオやLDで熊のような顔をしたピアニストが繊細な音楽を紡ぎ出し、生じる光景を眼にすることがある。もし音だけ聴いていれば演奏家に関する何らかの「神話」が生じたかもしれないが、映像によって演奏家の顔という現実のコンテキストが与えられることによって、想像力によって別のコンテキストが付け加えられることが妨げられたのである。

しかしながら、映像はまた別の形で新たな神話を作り出すこともある。作曲家やそれにまつわる題材を取り上げた映像が音楽とともに与えられることによって、映像はその作品にかかわる架空のコンテキストを生み出す。しかも文字で書かれた伝記とは異なり、映像のもつ圧倒的なインパクトと、その音楽との巧妙な結合によって引き起こされる強烈なイメージは、このようなコンテキストを生み出すうえで絶大な効果を発揮する。

（渡辺裕「聴衆の『ポストモダン』？」による）

（注）教会カンタータ：声楽曲の一形式。

コンテキスト：文脈。ここでは作品をとりまく状況や情報。  
LD：レーザーディスク。映像・音声の記録媒体の一つ。  
アンチテーゼ：ある主張に対立してとなえられる主張。

問一——線①「軽やかな聴衆」とあるが、聴き手の聴取態度のどのようなありかたを「軽やかな」といつているのか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 各人の好みで曲の一部を断片的に聴いたり、日常生活の中で時や場所を選ばず手軽に音楽を楽しむようなありかた。  
イ それぞれが軽妙と感じる曲をピックアップして聴いたり、日常生活を彩る重要なBGMとして楽しむようなありかた。  
ウ 適当に選んだ曲から作者の思想を探して楽しんだり、日常生活の折々に所構わず熱中して音楽を聴くようなありかた。  
エ 好きな曲を気ままに繋ぎ合わせて楽しんだり、日常の生活から逃避するために集中的に音楽を聴くようなありかた。  
オ 軽快な旋律を選んで編集して楽しんだり、日常生活に適度な刺激を与えてくれる効果音として聴くようなありかた。

問二——線②「大作曲家に関する数多くの『神話』とあるが、それらの『神話』はどのようにして成立したと考えられるか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

◇パラドックス＝通常とは逆の言い回しで物事を説明するさま。また、一見誤りのように見えるが、実は一種の真理を言い表している説。

◇実証的＝たんなる観念ではなく、経験的な事実に基づいて立証しようとするさま。

◇ドキュメント＝①文書・文献。②記録。

◇構造的＝全体を構成する内部の組み立てや仕組みに直接かわりのあるさま。

◇利他的＝過去や将来のことは考えず、ただこの瞬間の充実を求めようとするさま。「刹那」は、きわめて短い時間。

◇捨象＝物事から共通の要素や性質を抜き出し、一般的な考え方をくりあける（＝抽象）際に、他の要素や性質を排除すること。

◇インパクト＝強い印象や影響。

◇ポストモダン＝近代合理主義を反省・批判し、それを超えようとする傾向。脱近代。

POINT

△傍線部の内容を問う設問。「軽やかな」と「真面目」の対比をおさえ、「軽やかな」の表すところを把握する。それぞれが表す聴取態度を第一～第三段落の内容をもとに理解する。  
◇BGM＝background music。映像や舞台の場面、生活空間の雰囲気づくりのために背景に流す音楽。

△傍線部の内容を具体例に基づいて問う設問。第五～第七段落で、バッハ・モ

ア ベートーヴェンの肖像画や彫像によくみられる眼光鋭い強そうな顔のイメージから、彼が自らの運命の厳しさに屈することなく、強靱な意志をもつて一生を闘い続けた作曲家であったという「神話」が生じてきた。

イ モーツァルトがビリヤードをやりすぎて貧乏になったという事実は、彼の音楽が与える清澄な印象によって純化され、貧しい中でも作曲活動をおろそかにすることはなかったという「神話」を生み出すにいたった。

ウ 肖像画や彫像どおりの眼光鋭く雄々しいベートーヴェンの顔つきが、彼の音楽が与える勇壮な印象と重ね合わせられることで、彼が苦難に満ちた自らの人生に敢然と立ち向かったのだという「神話」が形成された。

エ 人生の後半においてバツハがライプツィヒにとどまった事実は、敬虔なルター派信者のイメージとあいまって、彼が宗教音楽に没頭し、数々の荘厳なカンタータを作曲したという「神話」を生み出すことになった。

オ モーツァルトの音楽が与える清澄な印象から、晩年の彼が当時の人々に理解されず、作品を演奏してもらえないという苦境に陥りながらも、貧困の中でひたむきに作品を書き続けたという「神話」が生み出された。

### 「純粹鑑賞」のあり方

問三 — 線③「ところがここに一つのパラドックスがある」とあるが、なぜ「パラドックスがある」といえるのか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 作品を純粹に鑑賞するとは、作者の心情を想像しながら聴くことであると考えると同時に、ただ作品を表層的に受容することをも要求されるという二面性をもつといえるから。

イ 作品を純粹に鑑賞するとは、作者の思想を真面目に取り入れることであると考えると同時に、作者とは切り離されたものとして受け入れることをも要求されるという二面性をもつといえるから。

ウ 作品を純粹に鑑賞するとは、作者の精神や個性を感じ取ることでありと考えると同時に、ただ作品を作品そのものとして享受することをも要求されるという二面性をもつといえるから。

エ 作品を純粹に鑑賞するとは、作者が曲を作った時の状況を調べたうえで聴くことであると考えると同時に、作品に集中して聴くことをも要求されるという二面性をもつといえるから。

オ 作品を純粹に鑑賞するとは、作者の人格や精神と結びつけて聴くことであると考えると同時に、精神を集中することによって感受することをも要求されるという二面性をもつといえるから。

問四 — 線④「なぜなら現代はまた……挙げることができる」とあるが、「映像メディア」は現代の音楽文化とどのような関係しているか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 映像メディアは、視覚的な要素をも含めたトータルな体験を回復することで「作曲家神話」を解体したが、その一方で視覚的な情報の方が聴覚的な情報よりも強いイメージをもつために別種の「神話」を作り出す原因にもなった。

イ 映像メディアは、従来は捨象されていた視覚的な要素を回復することによって一九世紀的な「神話」を解消する方向にはたらくが、その一方で映像のもたらすイメージが作品と結びつくことで新たな「神話」を生成させることにもなった。

ウ 映像メディアは、視覚的な要素を作品と結びつけることで近代の「作曲家神話」を解体したが、視覚的な情報のもつ圧倒的なインパクトと強烈なイメージを利用することで新たな「神話」を生み出すことにもなった。

エ 映像メディアは、視覚的な要素を強調することによって従来の「純粹鑑賞」がいかに聴覚的な要素に偏していたかを明らかにしたが、その一方で視覚的な要素を優位においたために新たな「神話」を作り出すことにもなった。

オ 映像メディアは、「純粹鑑賞」の原理を否定することによって「作曲家神話」を除去する方向にはたらくが、その一方で現実の作曲家や演奏家の視覚的な情報を与えることで別種の「神話」をもたらしことにもなった。

問五 本文の内容と合致するものを次のア～オから二つ選び、記号で答えよ。

ア 筆者は、現代の聴衆が「不真面目」になったことを批判しているのではなく、近代の聴衆の「真面目」さが数多くの「作曲家神話」を生み出したのであり、それらの「神話」を解体するためには「不真面目」になることが必要であったのだと主張している。

イ 筆者は、レコードやCDといった新しいメディアの出現が、音楽鑑賞の場をコンサートホールという特殊な空間から日常生活の場へと移動させたことと概括したうえで、そのことによって音楽が一般の大衆へとひろがることになったと歓迎している。

ウ 筆者は、現代が「脱神話化」の時代であるということは事柄の一面に過ぎないとしても、「作曲家神話」に支配された近代の聴衆のありかたに比べると、「神話」から解放された部分もある現代の「軽やかな聴衆」のありかたをより高く評価している。

エ 筆者は、「純粹鑑賞」とは、現実の作者から離れることと作者の思想や心情を感受することを同時に要求するものであったとしたうえで、そのために聴き手は現実から離れた作者像を想像力によって作り上げ、「作曲家神話」を生み出したと分析している。

オ 筆者は、現代の「軽やかな聴衆」が一九世紀に生成された「神話」を解体させつつあると賞賛しているわけではなく、彼らを「軽やか」にした新しいメディアも、「神話」の生成につながるコンテクストを生み出す可能性があることを指摘している。

カ 筆者は、レコードやCDの登場は音楽鑑賞の場を日常生活の場へと移動させ、ヘッドホンステレオの登場は音楽を持ち歩くことさえ可能にしたとまとめたうえで、しかしながら映像メディアが現代の音楽文化にもたらす変化はそれ以上に大きいと予想している。

「エ」「オ」

「ツァルト・ベートーヴェンそれぞれ  
の神話が生み出されたことを取り上げ、  
第九段落でそれらの神話が成立した事  
情が一般化して説明されていることに  
着目する。

△理由説明を求める設問。「パラドク  
ス」の意味を理解して、本文で何が  
「パラドックス」といわれているのか  
を読み取る。

△傍線部の内容を問う設問。傍線部以下  
の部分、特に最終段落が手がかりにな  
る。

△本文の内容と合致するものを選ぶ設問。  
各選択肢の内容とそれに該当する本文  
の内容とを照らし合わせて、その正誤  
を判断する。本文の内容と矛盾する選  
択肢や、本文に書かれていないことを  
述べた選択肢は合致しないものとして  
はずす。  
◇概括Ⅱ内容をひっくり返してまとめるこ  
と。要点をまとめること。